

第 67 回 企業活性化研究分科会・議事録

< 第六七回 2014 年 5 月 24 日 (土) 時間 : 13 : 30 ~ 17 : 00 於 : 専修大学 (神田校舎) >

参加者 : 尼野、井端、大野、木村、小林、高市、夏目、浜田、宮川、山本 (10 名)

1. テーマ : 業績低迷企業の再生可能生-半導体大手 2 社を例に-

- ・ 報告者 : 菅原智久 (代読 : 宮川宏) ・ 配付資料 : 8 枚
- ・ 報告内容の要旨

本報告では、ルネサスエレクトロニクス株式会社 (以下、ルネサスとする) と、エルピーダメモリ株式会社 (以下、エルピーダとする) の企業再生について、収益性分析、損益分岐点分析および再生分析の観点から検討をおこなった。

ルネサスおよびエルピーダにおける共通の問題点として、原価率の高さと営業利益率の低さを指摘した。原価率の高さおよび営業利益率の低さには、余剰人員、工場の増加などの問題が要因となる。また、半導体分野においては、プライスリーダーとして大量に製品を製造し、製造コストを低く抑えることが重要となる。そのため、当該 2 社に限らず、日本の産業というマクロ視点での問題になっていると議論が生じた。両社においては、人員、工場等の経営資源を効率的に活用し、不採算部門の整理縮小をおこない、固定費削減により収益性を改善する必要がある。また産業構造上の問題として、半導体分野においては、産業全体、川上から川下まで視野を広げた対策が必要であるとの結論にいたった。

2. テーマ : 再生企業の分析-シャープ株式会社-

- ・ 報告者 : 大野喜一 ・ 配付資料 : 7 枚
- ・ 報告内容の要旨

本報告では、シャープ株式会社 (以下、シャープとする) の分析をおこない、シャープが再生したのか否かを検討し、再生の方向性を考察した。

シャープは、2006 年度から 2011 年度において、多額の設備投資をおこなっている。当該期間の売上高および当期純利益は、2008 年度までは上昇傾向にあったが 2009 年度以降は下降傾向である。それゆえ、業績への影響を鑑みれば、設備投資は業績に貢献しておらず、投資の効果が得られていないと推測できる。資本的支出となる設備投資は、将来的に減価償却費等の費用を発生させる意味を有するため、設備投資がリスクを伴うことにもなる。

シャープの経営再建には、設備投資により増加した固定資産の運用が必要とされる。また、シャープの再生可否については、経営指標は結果であり、現在進行中の再生において再生の可能性を判断するのは時期尚早であるとした。再生可能性の判断のためには、財務面だけでなく、非財務面をも評価して見分ける必要があると結論にいたった。

3. 今後の予定について

- ・ 2014 年 6 月 28 日 (土) 分析企業-明治機械(株)- 井端先生
- ・ 2014 年 7 月 12 日 (土) 分析企業-㈱リコーコーポレーション- 夏目先生
- ・ 2014 年 8 月 2 日 (土) 分析企業-第一中央汽船(株)- 大野先生 (文責 : 浜田勇毅)